同人誌時評

難波田節子の人の優しさと縁を語る秀作（「遠近」）

逆井三三の足利義政の人生哲学を綴る力作（「遠近」）。森下征二の鋭い着想、豊かな構想を示す忠臣蔵異聞（「文芸復興」）

志村有弘

難波田節子の「逃げたカナリヤ」（遠近第79号）が、人の優しさと縁）を描く。充子の家の隣に住む村橋家の長男は大学の医学部に通い、次男は師範学校に通っていた。充子は幼いとき村橋の小母さんに可愛がられていた。充子は小母さんのカナリヤに触りたくて、密かに鳥籠を開けたとき、カナリヤが外に飛び出した。村橋家では泥棒が入って鳥籠をひっくり返したのだ、ということになった。戦争が始まり、充子の父は焼夷弾を受けて亡くなり、家も焼失した。戦後、充子が虫に刺されて行った病院の医師は、偶然にも村橋家の三男であった。充子はそこで、三男の明朗で優しい妻（看護師）とも会うことができた。村橋家も父と次男が空襲で死に、長男は戦死していた。そのとき充子は医師に「籠を開けたのは自分です」と言えなかったのだが、明日、本当のことを言おうと思い、「小母さん、あなたの末っ子さんは、こんなに立派なお医者さんになっていますよ」と、空に向かって叫びたかった、と記す。充子は小母さんが昔、「（三男に）将来はミッちゃんをお嫁さんにもらいなさい」と言ってある、と話していたのを思い出すが、「それは先生の記憶から消えてしまっているだろう。私も誰にも言ったことがない。幸せそうな素敵なご夫婦でよかった」という文で終わる。登場人物全てが心優しく、カナリヤ事件を忘れぬ充子も誠実な人柄。戦争の傷跡は悲しいが、心温まる秀作。

歴史・時代小説では、逆井三三の力作「引きこもり将軍」（遠近第79号）の「将軍」とは足利義政。義政は「一人で何かを決めるな」という将軍哲学を持ち、足利義教を殺害した赤松満祐を「自分の命が一番大事」なのに、「己の命も家もなく」した「赤松満祐は頭がおかしかったのだ」と言う。一方、「義教に批判される点」があるなら、「将軍として力を振るい過ぎたこと」・「まじめに将軍をやり過ぎた」ことだ、と述べる。義政の考えの基本は「戦うな」であり、「馬鹿どもには戦争をさせておけ、俺は俺の人生を楽しませてもらう」と、「風雅の世界に」生きることを願う。息子の義尚が飲酒・遊興にふけるのを、「それでいいんだよ。将軍として勇ましく威張ってみても、ろくなことにはならんぞ」と言う。何事にも達観した姿勢で、好きなように生きようとする義政の姿に拍手喝采したくなる。作者は「義政は武士の中で、唯一人平和のために骨を折った男」で、「将軍としては失敗した」が銀閣の建設や「東山文化の華を咲かせた」と評価する。義尚は義政を「敗北主義」で、「世間では父上を引きこもり将軍と評して笑って」いると言う。義政自身に言わせれば、自分のことを「戦乱をよそに遊興にふけっていた」というが「それがどうした。俺は無駄で無意味ではた迷惑なことをしなかっただけだ」と言う。結びの「全体としていえば、私は幸福だった。うまくいかないことも多かったが、生きたいように生きてきた」という義政自身の感懐が光る。乱世を生き抜いた将軍義政の姿を達意の文章で見事に活写。